

77 筑後久留米藩軍艦千歳丸の医官(藩医)中山元朴は 西郷従道や長州藩桂太郎と北越戦争へ

中山 茂春

福岡和白病院／久留米大学医学部非常勤講師(医学史)

筑後久留米藩は幕末に海軍を保有していたのである。艦隻は7隻、徳川幕府、薩摩、長州、肥前に次ぐ洋式海軍である。これは久留米藩第十代藩主有馬頼永、第十一代藩主有馬頼成(最後の久留米藩主)の側近(御側者頭格)の今井栄の影響が大である。久留米藩の幕末における開明進歩派の英傑今井栄は勝海舟と親しかったのである。この関係で藩が初めて蒸気船雄飛丸を購入するに当り、大津遠太、弥永健吾らを勝のもとに航海修行に送ったのである。又、今井栄は洋式兵学者古屋佐久左衛門について英語を習っている。古屋は医師高松凌雲の実兄に当る。古屋は御原郡古飯(現在の福岡県小郡市)の庄屋高松与吉の次男として天保四年(1833)に出生している。高松与吉の三男が適塾で学び、後に幕府奥医師になった高松凌雲である。今井栄の蒸気船、軍艦購入の目的は海軍の創設のみならず、沿岸貿易という事も頭にあったようである。今井は藩に開成局なるものを作り、筑後川河口に近い若津港を母港として茶、紙の長崎輸出や米の運搬をしている史実がある。戊辰戦争と久留米藩海軍の歴史については、浅野陽吉著の梅野多喜蔵先生伝により引用すると、次のような藩の記録がある。(梅野多喜蔵は大島圭介に蘭学を学んでいる)

北越戦争と千歳丸 慶応四年七月十三日、千歳丸、雄飛丸共に軍務官より朝廷御用船を命ぜられ北越戦争に参加することとなった。其の際、千歳・雄飛両艦の乗員を記すれば左の如し。北国輸送の命を受く 十四日、東京より兵庫へ廻航、兵庫軍務官より玉箱を積み、鹿児島へ廻航、それより北国へ兵員及玉箱輸送の命受く。船用金受取 十五日、船用金計千五百両と菊章旗拝受。鹿児島行 十六日午前十時左の通り乗船。村田新八、西郷新吾(後の従道候)、相良彦太郎、佐久間覚次郎、益満新十郎、外に五人(以上薩摩)、葉山先之進外一人(小倉藩)右の人々を乗せて、千歳丸兵庫出帆、小倉藩人は十八日下関にて上陸。二十日鹿児島着、薩人上陸。薩兵新瀉送り廿五日北国行き弾薬積み込む。廿八日、薩摩藩主より被下物泡盛一壺、塩豚一壺、西郷吉之助(隆盛)持参。八月朔日、西郷新吾外百七十人を乗せて出帆、十二日、西郷新吾外一名中途より上陸、廿一日新瀉着、薩兵上陸。八月三十日松ヶ崎抜錨、風浪を冒して羽州栗島に着、九月七日、午前四時栗島を出帆して松ヶ崎に帰る。東北遊撃隊秋田送り 九月二十日、澤主水正、薩州西郷新吾、長州桂太郎(後の公爵)、因州田中武之進其の他五十余人を乗せ、廿二日土崎前に投錨し、それより船川に投錨、乗り込み将兵は土崎及び船川より上陸。二十五日、帰帆の許可あり、軍務書記及外国人十七人兵庫迄便乗あり、十月三日船川抜錨帰港。

この時に千歳丸に乗り込み、藩医の中で唯一参戦した中山元朴についての資料はほとんどない。それ故つい最近まで久留米の歴史家の中では中山元琳が乗り込んだのを元朴と記述違いをしたのではという者さえあったのである。中山元琳は藩医中山家の直系で奥詰医師、明治三年から四年にかけて藩命により鹿児島医学校の英医ウィリスのもとへ遊学している。中山元琳の従兄弟が藩医松下元芳である。松下元芳は福沢諭吉の一代前の適塾の塾頭である。(福翁自伝に松下と福沢の適塾時代の思い出話がある)一方中山元朴については千歳丸に関する記録以外に資料らしきものは無い。戸籍によれば、藩医中山家の分家になる中山圓平(中山石庭、漢学者、相学者)の二男として文政九年(1826)十月十日八軒屋にて出生している。中山圓平(石庭)の長男は八軒屋にて竹軒義塾に開いた儒者中山泰橋である。中山泰橋の二男中山時三郎が東京の石家の養子となり、明治末期から大正時代に日本の名声を得た第五代石龍子(性相学の始祖であり骨相学の泰斗)である。中山元朴は廃藩置県後は荒木村に居住、明治三十五年(1902)二月二十七日没、享年七十七歳。